

Title	白紙の葉書
Sub Title	
Author	市川, 太一(Ichikawa, Taichi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2009
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.82, No.3 (2009. 3) ,p.144- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特別記事：内山秀夫先生追悼記事
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-20090328-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

入院先をお見舞いした時も、話柄は福澤センターの将来に関する事柄に終始し、センターに寄せる篤い想いがひしひしと伝わってくる三〇分間であった。その時はそれ程差し迫っているとは思えなかったが、ご容態の急変により四月六日、再びお声を聞くことができなくなってしまうのは痛恨の極みであるが、一足先に旅立たれた恩師石坂巖先生とお逢いになり、談笑されるお姿が彷彿とするのがせめても慰めである。

合掌。

名誉教授・帝京大学教授 坂井達朗

白紙の葉書

お通夜が終わった後、「白紙の葉書」を内山先生の奥様の富美子さんからいただいた。葉書の表にはいつもとは違って、乱雑に私の住所と氏名だけが書かれ、裏には何も書かれていなかった。

例年、冬になると広島の牡蠣を先生に送っていた。亡くなられた二〇〇八年の一月に先生から礼状をいただいた。

「カキのご恵送にあずかりました。篤く御礼を申し上げます。早速家人が茶碗蒸しに仕立ててくれまして、少し熱目にできたので、ほうと息を少し吹きかける思いで頂戴しました。おいしゅうございました。至福の時間でした。ありがとうございます。」

先生はやつとのことと、これだけのことを書かれたに違いない。

その前年、二〇〇七年の一月、内山先生からいただいた葉書が手元にある。

「『カキ』有難うございました。年頭、少し体調が崩れ寝たり起きたりをしていましたが、どうやら気候の変調に関係があるようです。問題なのは気力・体力が衰えたことで、翻訳に手をつける場所に及ばないのはいささか口惜しいことです。貴君はこれから見るべきものを見るわけですから、余りあせらないように。妙に力むと却って見えるものも見えなくなりますから。ともあれくれぐれもご自愛の上、御研鑽のほどを。忽々」

二〇〇七年の三月に内山先生の喜寿をお祝いするため、先生の教えを受けた者たちが『現場としての政治学』（日本経済評論社）を出版した。先生の健康が芳しくないので急いで出版しようという話になり、同期の北九州市立大学の中道寿一君が出版社を探し、編集の労をとってくれた。四月には内山ゼミOBのみなさんが会を企画されたが、先生は欠席された。会の翌日、一つ学年が先輩の柴田平三郎さん（獨協大学）、梅垣理郎さん（慶應義塾大学）、中道君と一緒に自宅にお伺いした。先生は意外に元気がよかった。「近くの郵便局に自転車で行けなくなった」、「歳をとるとエッセイを書いておくとよい」、「石川真澄さんが自分で返事は書けないのだが、

手紙をもらうとうれしかったらしい」というような話をされていた。

その後、先生の奥様と何度か連絡を取り、〇八年の二月にお会いする予定であったが、先生の健康がすぐれず、お会いできなかった。柴田さんから一度お見舞いに行っておいた方がよいという電話があり、急遽、三月三〇日に病院にお見舞いに伺った。病室に入ると、少し私の方に目を向けられたが、すぐに目を閉じられた。ベッドのそばに座り、先生と初めて出会った頃のことを思い起した。

先生の講義をとったのは博士課程一年（一九七三年）、初めて設けられた政治思想部門の「合同演習」であった。この演習には石井良博、多田真鋤両先生も出席されていた。演習は教員と一名の院生が全員報告をする形で進められた。内山先生はその時の成果をシンポジウム「政治的自由」としてまとめられ、院生の知的レベルと知的生産を明らかにしようとした。『法学研究』四六巻一号の「政治的自由」の中で、先生は博士課程に在籍する院生に向けて次のようなエールを送られている。

「われわれのアカデミーは院生諸君を研究者として、

だから同僚として確実に承認している。その証明を院生諸君がみずから担当することは、院生諸君の責務であるはずである。私は合同演習を機会として、院生諸君の知る品位がいよいよ高揚することを確信する。」

翌年から、博士課程に在籍する院生も『法学研究』に論文を指導教授と連名ではなく単独名で執筆できるようになった。柴田さんがその第一号であり、私がそれに続いた（なお、現在では博士課程在籍の院生のために『法学政治学論究』が刊行されて、この制度は廃止されたそうである）。

同じ頃になつた話をしたことになつた法学研究科科長石川忠雄先生に、私は一人で面談を申し込み、もつと大学院の教育体制を整えて欲しいとかけあつたことがある。内山先生が私のことを随分心配されていたということを知つたのは、少し経ってからである。

演習が終わってから先生を囲み、お酒を度々飲んだ。メンバーは内山ゼミの出身者とゼミではない柴田さん、梅垣さんと私であった。学部時代、米軍資金問題を通じて「学問は何のためにあるのか」、「大学とは何か」というような問題をまじめに考えてきたせい、か、それとも将

来の展望が見出せなかつたせいなのか、陰陰滅滅とした酒席であった。先生は院生に無理やり歌を歌わせた。内にもつてしまいがちな院生を外に引張り出そうとする先生一流のやりかたであった。

先生には、院生の時代にはシエルドン・S・ウォーリン『ホップズと政治理論の叙事詩的伝統』（未来社）を出版する機会をいただいた。私と同じように出版社を紹介してもらつた、先生のゼミ以外の院生や研究者は数え切れない。

大学院を終わる頃、現在勤務している広島修道大学に新設される法学部への就職の話を持ってきていただいたのも内山先生である。先生の友人である大賀祥充先生が修大におられ、私が同じ学校法人にある修道高校の出身者であつたからである。

先生は一九九四年に慶應義塾大学の選択定年制を選ばれ、新潟国際情報大学の初代の学長に就任された。二年後、私は広島修道大学の学長に選ばれ、今までとは違つた話をするようになった。二期目が終わる頃、もう学長を終わりにして一教員に戻りたいという手紙を書いたら、まだ続けたいという手紙をいただいた。予想に反した答

えであつた。研究者よりは大学の経営に私の適性がある
と判断されたのかもしれない。学長の任期が終つた三
年後、学長候補になつたのだが、自分の研究をまとめた
いという理由で候補を辞退した。その報告を先生にした
ら、既述の「妙に力まないように」という葉書をいただき
た。内山先生にその意味をお聞きしたいと思ひながら、
とうとうそのままになつてしまつた。

広島修道大学教授 市川太一

政治学者 内山秀夫先生

入学時に新一年生に配布される『塾生案内』が改題さ
れ、今日カラムス・グラディオ・フォルティオルと呼ば
れているその冊子の一九九〇―九二年度版の巻頭に内山
先生の「福澤先生という人」が掲載されている。

福澤先生を「人」と呼び、「書を捨てよ」と書き出さ
れる内山先生の新入生へのオリエンテーションの言葉に
導かれて進路を決めていった塾生がどれほどいたのかを
今確かめることは出来ないが、少なくとも内山先生には
そのオリエンテーション役が委ねられていた。私は当時
内山先生御自身が名実ともに慶應義塾を一身に担う今と
いうものを自覚されていたことを証言出来る者の一人だ
であり、先生は続いてその全精力を新大学の設立に向けら
れることとなつた。

新潟国際情報大学初代学長としての内山先生について
は、その創設以来先生を支えられた石川真澄氏などから
お話が伺えれば一番良いと思へるが、残念ながらその石